

The Cambridge Gazette: Lessons Learned

For Young Samurais in the Age of Globalization and the Internet

『ケンブリッジ・ガゼット: Lessons Learned』
第4号 (2006年9月)

ハーバード大学
ケネディ・スクール
シニア・フェロー 栗原 潤

グローバル時代における知的武者修行を目指す若人に贈る栗原航海(後悔)日誌@Harvard

今月号の目次

1. 新学期開始直前のハーバードより
2. 栗原後悔日誌@Harvard
3. 日韓関係—『交隣須知』再考
最も近い国を知らない日本人
先人の努力
我々の責任
4. 編集後記

1. 新学期開始直前のハーバードより

米国は通常9月が新学期です。なかには既に授業が開始したクラス・学校もあります。さて皆様は充実した夏休みを過ごされたと思います。スポーツや旅行等で気分転換をされた方も、また読書で教養を高められた方もいらっしゃるでしょう。私は昨年の夏、「ゲヴォシェイク(“GoeVoShake”)」と銘打ち読書三昧、そしてフロリダ州とメイン州に旅行して熱い米国と涼しい米国を経験しました。The Gazette の昨年9月号にも書きましたが、「ゲヴォシェイク」とは、ゲーテの「ゲ」、ヴォルテールの「ヴォ」、シェイクスピアの「シェイク」から採った私の造語です。戦前の書生が、デカルト、カント、ショーペンハウエル著書を親しむことを「デカンショ」と称したのに倣って造りました。今年の夏は、昨年同様“GoeVoShake”の著書、更には本学図書館で借りたトーマス・マンの演説録やシンガポールに在る紀伊國屋書店で購入した英中版の『菜根譚』を片手に静かな日々を過ごしていました。マンの講演録「ゲーテと民主主義(“Goethe and Democracy”/„Goethe und die Demokratie“)」を読み、ゲーテと本学との関係を恥かしながら初めて知りました。結果的には高齢故に諦

めましたが、ゲーテは米国に移り住むことを望み、また「制約の無い発展を育む法治国家制度を通じ、全世界の関心を集める素晴らしい国(«Ein wundervolles Land welches die Augen aller Welt auf sich zieht durch einen feierlichen gesetzlichen Zustand, der ein Wachstum befördert, welchem keine Grenzen gesetzt sind.»)」と米国を称えました。そして、1819年には、自らの全集をハーバード学に寄贈しています。こうしてゲーテからも愛されたハーバード大学より、「グローバル時代における知的武者修行」を目指す若い方々を対象とした「栗原後悔日誌@Harvard」第4号をお送りします。

2. 栗原後悔日誌@Harvard

皆様ご承知の通り、7月12日に勃発したイスラエル軍のレバノン攻撃により、中東地域は「憎しみが憎しみを生む」という「憎悪の悪循環(a “vicious cycle of hatred”)」の様相を示しました。現在、私はイスラエル産業界の招待で12月末に同国を訪問する予定になっております。2年前に私が所属する研究センター(M-RCBG)のフェローであったレバノン美人のサルワ・ハンマミ女史は現在ペイルート大学で金融経済を教えています。隣国とは言え、イスラエルからの招待なので、「近くまで来たよ」と気軽に連絡して会う訳にはいかないと元々思っていました。が、7月以降の一層緊迫した事態に接して、「ヒトの和と輪」は、個人と国、いずれのレベルにおいても簡単なようで現実には非常に難しいと実感しています。こうしたなか、7月31日、アフガニスタンの治安維持指揮権が米軍から北大西洋条約機構(NATO)軍に移譲されました。同日夜に放

映されたテレビのニュース番組に米軍司令官で本学出身のカール・アイケンベリー将軍の姿が映っていました。小誌創刊号でも触れましたが、5月4～6日、ハーバード大学でアジアの指導的な人々が集い、中長期の展望に関してオフレコで自由闊達に議論しようとする会合(Asia Vision 21 (AV21))が開かれました。AV21の際に同将軍からアフガニスタンでの御苦勞について伺う機会がありましたが、それから4ヵ月も経っておらず、穏やかな同将軍の顔を懐かしく感じると同時に「御苦勞様でした」と声をかけたくなる気持ちになりました。とはいえ、アフガニスタン動向もタリバンによるテロ活動が衰えないと聞き、中東情勢の複雑さを改めて感じています。

中東情勢同様、緊張関係が続いているのが東アジア情勢です。私はM-RCBGで朝鮮半島や台湾海峡に関して、中国や台湾、そして韓国の友人と、冷静に語らう機会に恵まれています。そして、互いに納得しかつ合意するのは、また喩えとして適切かどうかは別として、「東アジアをパレスチナのような地域にしてはならない」ということです。しかし、私の感じる限り、ナショナリズムが複雑に絡み合って東アジアにはいつ何時“vicious cycle of hatred”が生まれても不思議でない危険性が存在します。小誌前号でご紹介したM-RCBGでの日中韓香台の「ヒトの和と輪」を通じて得られる情報では、相手国を「非難」する感情的な意見が各国で聞かれるとのこと。私は、感情的に咎めるという「非難」の価値を余り認めません。その理由は単純で「生産的」ではないからです。「非難」は、非難した人は感情的なはけ口を見出し、或る意味で快感を覚えるでしょうが、一方の非難された人は快く思うはずがありません。こうした行為からは私が主張する「ヒトの和と輪」は決して生まれません。一方、「批判」は、「非難」とは異なり、高い「志」をもって行われる限り「生産的」であると考えます。こうした「批判」は、①相手の立場、視点を理解した上で行うこと、②感情的でなく冷静に行うこと、③「ヒ

トの和と輪」を形成して協力関係を築くという点で建設的であること、この3条件を満たす時、意義有る、或いは「生産的」な行為であると考えます。こう考えた時、私が日本に最も近い国である韓国との間で感情的で「非生産的」な「非難」が横行していることに心を痛めている人間の一人であることを認めざるを得ません。韓国の方々を冷静に「批判」するとしても、私達日本側の感情的な「非難」は何とかならないものかと私は考えます。

3. 日韓関係—『交隣須知』再考

今回のテーマは「日韓関係—『交隣須知』再考」です。結論を先取りして申し上げますと次の通りです。すなわち、我が国とその最も近い国である韓国との関係は残念ながら様々な点で摩擦の種を抱えている。最も近いが故に、地理的にも歴史的にも摩擦が発生することはやむを得ないとしても、日韓両国共に、互いを正確に知ることなく、往々にして自らが根拠無く形作った「イメージ」に基づいて感情的に「非難」の応酬をしている嫌いが無いでもない。グローバリゼーションの時代において、米国と共に日本が大国として世界の中で責務を果たしてゆかなくてはならない時、「最近隣国」との摩擦は我が国の国益の観点から最小限にとどめる必要がある。そのためには、相手である韓国を改めて良く知る必要がある。また、韓国からの不当な「非難」に対しては、国際的に観て正当化された論理に基づき、冷静に反論して相手の理解を求める必要がある。こうして友好的かどうかは別としても、少なくとも平和的な関係の礎を築く必要がある。これが今回の話であります。

私事で恐縮ですが、東京に在る赤坂プリンス・ホテルの旧館で私は結婚披露宴を行いました。旧館にはフランス料理店「トリアノン」やバー「ナポレオン」が在り、皆様のなかにも同館を訪れた方がいらっしゃることでしょう。が、この館が朝鮮の李王朝に縁の深い館

であり、李朝最後の皇太子、イ・ウン(李垠)が我が国の皇族、梨本宮方子妃と結婚されてお住まいになったことを知る人は少ないのではないのでしょうか。私自身も、結婚式の際、媒酌人をお願いした旧華族の坂本俊造氏から「若い頃、この邸の住人イ・ク(李玖)王子をはじめ、学習院の友達とかくれんぼして遊んだ所で初めての媒酌人を務めるとは不思議な縁を感じる」旨のお話を伺うまでは全く知りませんでした。こう考えますと、知る知らないにかかわらず、日本と韓国とは地理的条件を理由として歴史的にも最も深く繋がった国であることは皆様も感じて頂けると思います。

小誌でよく言及させて頂く岡崎久彦大使がペンネームの長坂覚で書かれたご著書『隣の国で考えたこと』があります。同書は、同大使が1973年10月から1976年3月まで、公使としてのご経験を基に著されたものですが、その中に次のような表現があります。「日韓関係に関する限り、客観的に見て、どうも日本側が言われても仕方のないことの方が断然多いようです。その理由はいろいろありますが、そのすべての根底にあるものは韓国についての日本人の無知のひどさです。後で申し上げるように韓国の方の対日理解にも問題があるのですが、日本人の無知は少し常識の範囲を超えています。私自身はずかしい話ですが、日韓関係を志して当地に赴任して来ながら、ヤンパン(両班)という言葉一つ知りませんでした。…これほどの無知の背後にはたしかに異常な環境があるようです」、と。

最も近い国を知らない日本人

私自身も、岡崎大使がご指摘された「隣国について無知な日本人」であることを認めざるを得ません。私が初めて韓国を訪れたのは1997年の秋です。それまでは、韓国の友人も極めて少なく、私自身、日韓の「ヒトの和と輪」に恵まれませんでした。従って、韓国に対する「イメージ」は、カルビやキムチ等を通じて独特の美味しい食文化を持つ国、文禄

慶長の役や韓国併合を通じて辛い経験を我が国が過去において押し付けた国という、一般常識に基づく極めて単純なものでした。そして判断材料も日本語情報、それもマスメディアを中心とする情報しかありませんでした。このように私にとって韓国は言わば「実感の薄い」、日本の最も近い国でありました。

そうしたなか、1997年秋、「IEEE1394」と呼ばれる技術規格に関する国際会議に参加するため、韓国を初めて訪れる機会が巡って来ました。会議出席の準備は別として、皆様が海外旅行の際に懐かれる感情同様、私も初めての韓国に期待と不安を懷きつつ、ソウルのホテルに到着しました。生来、「街なか探索」が好きな私は、持参した漢字とカタカナで表示されたソウルのグルメ・ガイドブックを片手に徒歩でお目当てのレストランに向かいました。私達は無意識のうちに自分の価値観や習慣が当然かつ標準的であると考えてしまうような気がします。私はソウルを訪れるまでは、東京のように道路標識や駅の表示には漢字とローマ字が必ず付いているものと信じ込んでいました。が、道も住所もハングルで表示されているではありませんか!! 幸いにも英語が分かりそうな若い人を見つけ、やっとの思いでレストランに到着しました。

さて、旅行をはじめ何にしる、「第一印象」は重要です。レストラン自体は大衆的ですが大変美味しく、またお店の「オバちゃん」が優しく、更には紛失癖の私が財布をはじめ貴重品が入った鞆を忘れたにもかかわらず、30分後に慌てて戻ると忘れ物として大切に保管して頂いたので、私と同僚は訪韓第1日目から「親韓派」になってしまいました。と同時に、私はそれまでの自分の姿勢が急に恥かしくなりました。私は、英語をはじめとてまがりなりにも複数の外国語を理解し、頻繁に海外へ出張及び旅行をする国際派の日本人であると愚かにも自惚れていました。ところが、私自身、「最近隣国」の韓国に関して、全く無知の人間だったのです。もしも韓国が無視し

うる程の弱小国であったなら無知であっても誰も責めはしないでしょう。しかし、韓国は日本と同様、the “Rich Nations’ Club”と呼ばれる OECD の加盟国で、世界第 11 位(GDP 基準)の規模を持つ国です。このように国際政治経済社会の視点からして、「最近隣国」を知らない私は本当に国際人なのだろうか？これでは私の親しい米英仏独、そして中国の友人達から陰で冷笑されるに決まっています。

かくして私の我流「韓国学」が始まりました。翌年の夏休みは家族及び弟夫婦と共にソウル旅行を楽しみ、またエレクトロニクス分野の国際会議で再びソウルを訪れる機会も持てました。しかし、残念なことに怠惰で非力の私にとって、「韓国学」は正しく「牛歩の歩み」です。再び私事で恐縮ですが、私の父も、縁あって、1998 年 10 月、キム・デジュン(金大中/김대중)大統領が来日された際、午餐会に招かれ、また韓国で何度か講演を頼まれるようになりました。そして、父は息子である私に向かい、スピーチにおける挿話としての「気の利いた」韓国の故事や文芸作品を尋ねました。しかし、韓国文化に関して無知の私には全く思い浮かばないのです。現在のように、韓国ブーム(「韓流(한류)」)が巻き起こり、韓国ドラマ『冬のソナタ(겨울연가)』や『宮廷女官チャングムの誓い(大長今/대장금)』が放送されている時ならば、「韓流オンチ」の私ですら、友人から何かを聞き出せたでしょう。また、今なら 17 世紀の偉大な学者である柳馨遠等の名前も挙げられたでしょう。しかし、最近まで韓国に関して無知だった私は何も思い浮かばず、自分自身に驚いた次第です。

先人の努力

こうした事態に反省し、少しずつではありますが、日本に最も近い朝鮮半島の歴史を勉強するようになりました。そうした過程で、多くの日本人が日韓関係において心を砕いて努力したことを知りました。遠く 17 世紀にまで遡りますと、紆余曲折はあったものの徳川

幕府が中国の明・清が採る「冊封(サクホウ)外交」の下にある朝鮮に対し、慶長の役の終了(1598 年)後、9 年の歳月をかけて、相手側の警戒心・猜疑心を氷解させ、「互いに欺かず、争わず、信(よしみ)を通じて交わる」精神で、日朝関係を改善した歴史を知ることができました。また、赤穂浪士の吉良邸討ち入りで元禄の江戸が大騒ぎとなっていた 1703 年、儒学者の雨森芳洲は、体系的な日朝語学教育の欠如を指摘し、自らプサン(釜山)に在る草梁倭館でハングルを学び、『交隣須知』を著したことも学びました。更には、前述した「動乱の中の王妃」、梨本宮方子妃が、1916 年、15 歳の夏に大磯の別荘で自らの婚約を新聞報道を通じて知り、「怒りとも悲しみともいえない熱い涙」を流したものの、その 4 年後には「日韓の架け橋」として政略結婚を自らの運命として受け入れ、そして戦後は生活苦のなかにあっても韓国において社会事業を成して「韓国障害児の母」と韓国国民から敬愛された人生を送られたことを知りました。このように、私は本学図書館が所蔵する芳洲の『交隣須知』や方子女王の『すぎた歳月』を読みながら日本の先人が残した日韓友好に向けた努力を少しずつ学んでおります。

私が皆様と同じような年代(未だ純情な 20 代)であった頃、第一の愛読書は東大新書版の『きけわだつみのこえ』でした。同書(とハンカチ)を片時も離さず、旅行や飲み会に、それこそ何処にでも持ち歩いて行きました。同書の中に、敗戦翌年の 5 月(東京では極東国際軍事裁判が開廷し、現在のソニーである東京通信工業が設立された頃)、日本から遠く離れたシンガポールで、戦犯として処刑された京都帝国大学出身の一日本兵の手記があります。その方は、手元にあった京都学派を代表する哲学者田辺元博士の『哲学通論』の余白に言葉を残されました。チョッと長いのですが、ご辛抱頂きここに引用させて頂きます(私としては全文引用したい気持ちですが…)。すなわち、「私は何ら死に値する悪をした事はない。悪を為したのは他の人々である。しかし

今の場合弁解は成立しない。江戸の敵を長崎で討たれたのであるが、全世界から見れば彼らも私も同じく日本人である。彼らの責任を私がとって死ぬことは、一見大きな不合理のように見えるが、かかる不合理は過去において日本人がいやというほど他国人に強いて来た事であるから、行きどころはないのである。日本の軍隊のために犠牲になったと思えば死にきれないが、日本国民全体の罪と非難とを一身に浴びて死ぬと思えば腹もたたない。笑って死んで行ける」、と。更には、「この日本降伏が全日本国民のために必須なる以上、私一個の犠牲のごときは忍ばねばならない。苦情をいうなら、敗戦と判っているながらこの戦を起した軍部に持っているより仕方がない。しかしまた、更に考えを致せば、満州事変以来の軍部の行動を許してきた全日本国民にその遠い責任があることを知らねばならない」と述べ、「万事に我が国が他より勝れたりと考えさせた我々の指導者、ただそれらの指導者の存在を許して来た日本国民の頭脳に責任があった」と語っています。この方は、「今私は世界全人類の気晴らしの一つとして死んで行くのである。これで世界人類の気持ちが少しでも静まればよい。それは将来の日本に幸福の種を遺すことなのである」と語り、帝国日本が軍靴で踏み躪った朝鮮半島を含む諸外国の憤りを少しでも和らげることを願い、また敗戦国日本の再生を祈りつつ、微笑みながら自らの命を我が国に捧げられました。

我々の責任

ご賛同頂けると思いますが、『交隣須知』をはじめとする先人が遺された努力を私達は決して無にしてはなりません。私も限られた力ながら努力を惜しまないつもりです。そして皆様のような高い「志」を懐き才能溢れる若い方々の活躍こそが、何よりも不可欠です。こうした認識に基づき、将来の日韓に関して私達が担う責任を考えてみたいと思います。現在、慶應義塾大学の福田和也教授が、『文藝春秋』誌に連載「昭和天皇」を發表されてい

ます。8月号では、「皇太子のマナー教育」と題し、1921年に欧州に外遊された皇太子時代の昭和天皇と側近の話が書かれています。その中で福田教授は日韓関係にも触れられています—大韓帝国初代皇帝で退位を強要された李太王が1919年に急逝しましたが、朝鮮では毒殺説が流布し、また葬儀に際して「(日本側の)朝鮮総督府の対応は、信じ難いほど愚劣なものであった」そうです。そして、同教授は、「このような処置が、どれだけ朝鮮の人々を傷つけたかは、容易に想像できるものだろう」と書き、日本側の対応が「サミルンドン(三一運動)」等の各地における反日独立運動を誘発した歴史を我々に教えて下さいました。私がここで注目するのは、「サミルンドン」によって著しく傷ついた日本の「国際的イメージ」です。また福田先生の記述の中でもう一つ私が感じたのは、帝国日本に対する朝鮮の人々の憤りの日本への影響です。すなわち、朝鮮の人々の日本に対する反発は、①我が国自身の対外的評価を損なうと同時に、②皇太子であられた昭和天皇の外遊時、襲撃の恐れから厳重な警備体制を強いられ、警備が手薄とされた寄港地の香港では、囹の役割を果たす陽動隊まで編成されることになりました。

日韓の軋轢はこのように①日本の「国際的イメージ」、②「最近隣国」韓国との確執による全世界的に被る日本自身の負担という視点から再評価する必要があると考えます。そして、この2点を考えた上で私達の責任を考えてみたいと思います。まず、①の日本の「国際的イメージ」ですが、これは日本の「国際的イメージ」を懐くのは「誰」かという問いに従い考える必要があります。すなわち、日本自身が懐く「国際的イメージ」のほか、韓国、中国、北朝鮮等のアジア諸国、更には小誌第2号で示したように我が国にとって最も重要な国際的パートナーである米国、そして欧州諸国、これらの国々が懐く日本の「国際的イメージ」です。ここでは私の限られた経験である上に、また紙面の制約から単純化し過ぎて誤解を招く危険も覚悟の上で、韓国と

欧州諸国に関して私が留意している点について触れてみたいと思います。尚、自己イメージは皆様ご自身でご判断されるのが適当でしょうし、中国やその他のアジア諸国、そして米国については改めて次号以降にご説明します。また北朝鮮は私が持つ判断材料は余りにも限られたものですので控えさせていただきます。

韓国が持つ日本の「国際的イメージ」について興味深い一つの点をご紹介します。本学の韓国出身の友人達は、中国出身の方々同様、一つの決まった意見を私に語ります—「ジュン、もしボクが韓国国内に居て、韓国国内の情報だけで判断するとしたら、恐らく『反日』の意見を持っていたでしょう」、と。これに関連して次のようなことも言ってくれます—「政治家や企業人のなかには、韓国にとって良好な日韓関係こそが重要であると理解している人は多くいます。しかし、『反日』というナショナリズムの方向に大きく傾く世論に抵抗することは難しいのです」、と。私はそうした意見に対して、いつも微笑みながら次のように答えます—「大丈夫ですよ。何故なら、そうした状況を分かっておられるあなた達がいらっしゃるから。また日本も過去において世界情勢に暗い人々が犬吠を占めてしまったために先の世界大戦に突入しました。我々も昔の教訓を生かしますから大丈夫ですよ」、と。

次に欧州諸国が抱く日本の「国際的イメージ」に触れます。私は彼等の視点を重視しています。その理由は、欧州の人々は、東アジアの状況を或る意味で「対岸の火事」の如く、平穏にかつ冷淡に観ることが出来る地政学的距離を保てるからです。従って、ケンブリッジで私は欧州の無責任な対中武器輸出に関して仏独両国出身の友人と冷静ながら厳しい調子の討論をする一方、ナショナリズムが絡んだ日中韓3カ国間の熱い関係に関して彼等が下す極めて冷淡な見解を、「公平」かどうかは別として尊重しております。そして彼等の「対日イメージ」を一言で要約すると、「日韓の差はよく分からない」ということです。

脱線で恐縮ですが、興味深い私の経験をご披露します。本学周辺には韓国料理店が幾つか在り、そこでは必ずと言って良い程、寿司や刺身も食べられます。欧米の友人と共にそうした韓国料理店に行きますと、彼等は時折寿司を、私は「必ず」韓国料理を注文します。彼等が不思議そうに「ジュン、ここではどうして寿司を頼まないの?」と尋ねるので、私は「この店は韓国系の人経営する韓国料理店だから」と答えます。その時彼等は驚いた顔で「何処が違うの?」と質問します。こうした問答を数回経験すると、「ははん、欧米人(そして豪州人等)は日韓の差は判らないのだ」と実感します。確かに欧州から観れば、日韓摩擦は「コップの中の嵐(A [storm/tempest] in a teapot/Une tempête dans un verre d'eau/Ein Sturm in der Teekanne)」としか映らないのでしょうか。しかもこの場合、相対的に大国である日本側が不利に映るのも容易に理解出来ることでしょう。逆に、ドイツとポーランドとの確執、或いはベルギーにおけるフラマン語圏とワロン語圏との確執に関して、私達は同様に「コップの中の嵐」と感じます。こうして、欧州だけでなく、ラテン・アメリカや中近東諸国、更には米国でも、(a)欧州・中東・ラ米等世界全体を俯瞰しつつ米国の戦略を練るグローバル・ストラテジストや、(b)伝統的で今尚主流派である欧州との関係を第一義に考えるアトランティシスト(Atlanticists)から観れば、日韓の軋轢は、「蝸牛角上の争い」としか映りません。しかも、日本側の主張・態度が世界的な価値観で正当化されない限り、強国である日本側に不利な「国際的イメージ」が形成されてゆくことは明白であります。

次に、②「最近隣国」韓国との確執から、日本が全世界的に被る負担について考えてみましょう。日韓摩擦等により日本が被るマイナスの「国際的イメージ」を払拭するため、日本は様々な形の「余計・不必要」なコストを負担する状況に陥る危険性があります。例えば、国連での地位・評価を考えてみましょう。日本による多額の国連分担金や積極的

な国際平和維持活動(PKO)等は誰もが認めるところですが、こうした努力に見合う国連内での地位・評価に関してはもう少し検討の余地がありましょう。これについては地道な努力を要しますが、明らかに中韓両国との関係改善は最重要課題の一つです。また、中韓両国の対日非難が、思わぬ形で、しかもグローバルに伝わる危険性があります。IT時代に入って、真偽にかかわらず、情報が瞬時に世界中を駆け回る事態が出現してきました。根拠の無い悪意ある情報が、国籍を問わず日本の行動に不満を持つ人々によって世界中に流布された時に我が国が被る損失を事前に予測することは不可能です。この意味でも、「備えあれば憂い無し」の精神で、日韓関係の改善に皆様と共に努力したいと思っています。

私はこれまで、それぞれ多寡はありますが、①日本人の韓国に対する知識の欠如、②日韓友好に向けた我が国先人の努力、③植民地時代に行った帝国日本の過ちとそれに対する韓国人の屈辱感と反発、④日韓の軋轢による日本の「国際的イメージ」の悪化の危険性及び日本が被る全世界的な負担、以上4つについて論じてきました。良かれ悪しかれ、韓国は日本にとっての「最近隣国」故に、地理的にも歴史的にも難しい問題を抱えることは地政学上必然でもあります。そして物理的に離れられない以上、日韓両国は、(a)将来、創造的な形で関係を維持・改善するか、それとも(b)相当の覚悟と戦略的計算の上で対立的な関係にするのか、二者択一を迫られています。この選択に関して、私は日本の戦略的課題に照らし合わせて次のように考えます。小誌前号で述べた通り、私は今世紀初頭における東アジア最大の課題は「中国の発展過程で噴出する問題に対し、日米両国が協力して如何に中国に助言と苦言を案出するか」と考えております。その上で、中国と上手に付き合いつつ、朝鮮半島と台湾海峡の問題を平和裏に処理する必要があります。こう考えれば、日本の戦略的課題の順位から勘案して、韓国との良好な関係は必要不可欠になります。

では翻って、韓国の戦略的課題から照らし合わせた場合の日韓関係はどうでしょうか。残念ながら、韓国現政権の外交戦略は韓国の友人ですら「分からない」と答えています。また私自身韓国政治の専門家でもありません。そうは言っても皆様に申し訳ないので、誤解を恐れず、日米中を中心に観察している一研究者の視点として、我流ながら大胆に韓国の政治課題をまとめてみます。すなわち、韓国の政治課題は、①自由主義世界のなかでの長期的・安定的な経済発展、②悲願の南北統一に向けて長期的な視野に立った努力、③常に強硬な姿勢を示す北朝鮮に対する忍耐ある対応、④韓国国内における「親北朝鮮派」を睨みながらの国内政治の安定、⑤韓国併合以後の反逆者(対日協力者/チニルパ/친일파)に対する糾弾と歴史の清算、以上5つであると私は考えます。同時に、上記5つの政治課題は、一方を重視すると他方が軽視されるという形で、「整合性」を欠くものと私には映っています。こうした政策課題の「不整合性」の結果、韓国を傍らで眺める私達や米国人(時には韓国人自身)が、韓国の行方に対して不安と疑念を抱くことになると考えております。

これを対日関係改善に絡めて考えますと、①の経済発展に関連して、韓国の主要産業における国際競争力は日本の精密部品産業によって支えられている現状を勘案しますと、日韓の友好関係は不可欠です(ここでは省略しますが、韓国産業界の内部でも様々な理由から意見は完全には一致しておりません)。しかし、その一方で、②の南北統一と⑤の歴史の清算に関して、北朝鮮と韓国は協力して日本と対峙する形になっております。特に②では、日本の反発を招くとしても、日本の植民地時代の辛い記憶を強調することは、南北朝鮮民族に統一への意識を強める効果があります。また、⑤の歴史の清算について私自身は部外者なので善悪の価値判断は出来ませんが、韓国国内での対日協力者に対する今尚続く厳しい批判は傍らで見聞きする私でさえ驚かされ、「歴史の重み」を感じさせられます。

北朝鮮との関係でも、韓国の政治課題に「不整合性」が見られます。②の南北統一では北朝鮮と同意見でも、③「火の海(불바다/a sea of flame)」という表現を平気で使う北朝鮮の傲慢な態度は、安全保障上また経済的にも韓国に対して脅威を呈しています。また④の北朝鮮寄りの国内左派が韓国政治を不安定にする危険性もあります。換言すれば②の統一を推進すればするほど、現状では③と④において韓国は苦境に陥る訳です。加えて①の経済発展に関し、韓国は自由主義社会の一員であり、更には大戦後、③の点でも覇権国米国の「力」を必要としております。しかし、近年、②の統一を強調するあまり、韓国はテロリストと連携して国際秩序を乱す北朝鮮に苛立つ米国から厳しい目で睨まれつつあります。

韓国に対する米国の不満と疑念を強めさせるもう一つの要因は北朝鮮寄りの中国の台頭です。現在、韓国の主要企業は中国市場に狙って様々な努力を行っています。その結果、韓国の対中輸出は対米輸出や対日輸出を上回るようになりました。こうして韓国国内で対米依存の意識が希薄化し、逆に若年層を中心に南北統一が膠着状態にある元凶は米国だと考える人々が多くなりました。こうした韓国の動きは、米国の太平洋政策を考案するパシフィスト(Pacificists)やグローバル・ストラテジストのなかに韓国に対する不満と疑念を招いております。小誌前号でも触れた韓国の著名なジャーナリスト、カン・ヒョサン(姜孝祥/강효상)氏は、『文明の衝突(The Clash of Civilizations and the Remaking of World Order)』で有名なサミュエル・ハンチントン本学教授と面談した際、同教授から「朝鮮は歴史的に中国の庇護の下にあったのだから、韓国が米国と袂を分かつの驚くことではない」と言われたと私に語ってくれました。この話を聞きつつ、韓国現政権が唱える(私には理解不可能な)「北東アジアの balancer (동북아 균형자/Balancer in Northeast Asia)」論を思い出し、更には、日清及び日露戦争時の世界情勢や桂=タフト秘密協定等を思い浮かべており

ました。中露両大国に隣接し、海峡を挟んで強国である日本、更には太平洋を挟んで極超大国米国と接する南北に分断された朝鮮半島を包む国際環境はまことに厳しいものです。

このように、歴史、ナショナリズム、そして複雑な国際関係が絡んで、日韓関係改善は容易ではありません。つい最近、アジアで開催された会合に出席した米国の同僚が、私の顔を見るなり、こう言いました。「ジュン、大変な会合だったよ。韓国人が日本を感情的に非難して会合は台無しだったよ。だからアジアは嫌いなんだ」、と。それを聞いて、日韓関係の難しさを改めて感じた次第です。前述した通り、日韓に横たわる軋轢の起因は確かに日本です。従って日本側は弛まぬ努力をする責務があります。しかし同僚が私に洩らした言葉でお分かりの通り、韓国自身の将来を考える上でも、良好な日韓関係を形づくる努力を韓国の方々にもお願いしたいと考えます。20世紀以降の日韓関係は、不幸にも①戦前の流血を伴う交戦(belligerent)状態から始まりました。しかし様々な人々の努力で、②戦後から現在に至る過程で、一部に感情的な「非難」が飛び交う敵対的な(antagonistic)関係が残存するものの、平和的な(amicable)関係にまで到達しました。が、これまで述べてきましたように残念ながら未だ③友好的な(friendly)関係を結ぶ分野は極めて限定的です。とはいえ、日韓両国の国益を考える時、①から③への方向性を逆回転させるのは愚かなことであると誰もが認めて下さると思います。私達の責任は、(a)難しい過去と複雑な国際関係を認識し、(b)寛容と忍耐を忘れず、感情的で「非生産的」な「非難」の応酬を避け、(c)日韓双方向の建設的な批判が自由闊達に許される機会を作る必要があります。こうして友好的関係に一気に到達するのは無理であるとしても、平和的關係を強固なものにしてゆくことが肝要です。

ボストン大学に、ウィーンに在る人間科学研究所 (Institut für die Wissenschaften vom Menschen (IWM))の姉妹機関である人間科学

研究所(Institute for Human Sciences (IHS))があります。私はこの研究所主催の会合に頻繁に参加しておりますが、ここでの会合は米欧関係と欧州内問題(西欧や旧共産諸国)を扱うもので、黒い髪をした東洋人の参加は大抵 2、3人で、私一人だけという時すらあります。美しい赤い髪やブロンドの毛をした東欧の人々と、ヴォルガ系ドイツ人(Wolgadeutsche/Volga Germans)の悲劇や、大哲学者イマヌエル・カントや日本にも縁の深いブルーノ・タウトを生んだ街ケーニヒスブルクの悲惨な状況等について話していると、「やっぱり彼等からすれば、日中韓はひとくくりにした『東洋人の国』なんだな」と感じ、同時に日本人と朝鮮人との異同を軽快に論じた海音寺潮五郎・司馬遼太郎対談録『日本歴史を点検する』の中の数々の興味深い言葉を思い出しつつ思わず微笑んでいます。繰り返しになりますが、東アジアで展開する熱い争いも、憎しみが今尚蓄積する中東や、経済的困難に直面する東欧を含む世界全体からすれば、「コップの中の嵐」にしか過ぎないのかも知れません。

こう考えますと、私達は創造的精神で、平和的な日韓関係を形づくってゆく必要があります。嘗て石橋湛山首相は、アジア外交に関し、「軽薄弱小」ではなく「深刻強大」なる打算主義を抱くことの重要性を、また、「大欲を満たすために小欲を棄てる」ことの重要性を説きました。「我が国の総ての禍根は小欲に囚われていることだ、志の小さいことだ」と語る石橋首相の教えに従い、私達は一層の高い「志」と「大欲」を持たねばなりません。その意味で、冷静な頭脳と熱き心を以って、私達は日韓の知的対話を推進する必要があります。しかし、その道程は決して楽ではありません。先日、日本サムスン株式会社の顧問をされている石田賢氏から興味深いお話を伺いました。歴史的価値判断は別として、以前は日本語を解する韓国の方々が大勢いらした御蔭で、日韓で質の高い知的対話を日本語で行えたそうです。しかし、そうした韓国の方々がご高齢になり、また数の上でも少なくなる

につれて、会話の内容がキムチ等、日常的な次元の低いものとなり、将来の日韓対話の質的劣化が心配されるとのことでした。私は石田氏のお話を聞いて、政治経済的に重要な日韓関係における知的な「ヒトの和と輪」を強化する必要性を改めて感じた次第です。

4. 編集後記

2003 年 6 月から 3 年間発行した *The Cambridge Gazette* の後継版第 4 号の本文は以上です。旧版昨年 12 月号の最後に、10 月 21 日、トラファルガー海戦が 200 周年を迎えたことを書きました。その日、もう一つのことには私は気を取られていました。それは 5 年に一度開催されるショパン国際コンクールの結果発表でした。皆様ご承知の通り、1 位がショパンの母国、ポーランドのラファウ・ブレハッチ氏、2 位空席で、3 位が韓国のイム・ドンヒョク (Lim Dong-Hyek/임동혁) 氏及びイム・ドンミン (Lim Dong-Min/임동민) 氏、4 位が日本の関本昌平氏及び山本貴志氏、5 位空席で、6 位が香港のカ・リン・コリー・リー (李嘉齡) 女史でした。5 年前の 2000 年は、重慶出身の中国人が 2 人入賞し、リ・ユンディ (李云迪/李雲迪) 氏が 1 位でチェン・サ (陈萨/陳薩) 女史が 4 位、そして日本の佐藤美香女史が 6 位でした。この結果を見ましても、「芸術の世界」において東アジアの素晴らしさは誰もが認めるところです。今後の課題は、芸術だけでなく、知識、経済、そして政治の世界でも、東アジアが自身の素晴らしさを世界の人々に示してゆくことだと思います。

以上

編集責任者	Jun KURIHARA
栗原 潤	Senior Fellow,
ハーバード大学	John F. Kennedy School of Government,
ケネディ・スクール	Harvard University
シニア・フェロー	
連絡先	
Mailing address:	79 JFK St., M-RCBG, Cambridge, MA 02138
Office address:	124 Mt. Auburn, Cambridge, MA 02138
Tel:	+1-617-384-7430; Fax: +1-617-495-4948
Email:	Jun_Kurihara@ksg.harvard.edu; JunKuri@aol.com